

なぜプラグマティズムにおいてヘーゲルが問題となるのか —R・ブランドムのネオ・プラグマティズムとヘーゲル主義—

大河内 泰樹（一橋大学）

プラグマティズム哲学がアメリカで誕生したとき、その創始者たちが標的としていたのは、アメリカにおいてヘーゲルを受容した「絶対的観念論」であった。「効果だけが、その対象についてのわたしたちの概念的理解(conception)である」とするパースの格律は、わたしたちの生活世界における行為になんら影響を及ぼさない概念を、さも哲学の主要問題であるかのように議論する観念論に対する批判として理解することができよう。

他方、分析哲学もまたヘーゲルに代表される大陸哲学が伝統的に扱ってきた問題を「Scheinprobleme」と断じ、その伝統と断絶することで、言語分析を中心とした「地に足のついた」哲学を志向したのであった。このように共通した動機を持ちながら、それぞれ違う方向をとった分析哲学とプラグマティズムであるが、その後分析哲学が隆盛する中、しばらくのあいだプラグマティズムは後景に退くことになった。ところがようやく20世紀後半になり今度はクワイン以降分析哲学の中からプラグマティズムについての議論が現れ、いまではネオ・プラグマティズムが分析哲学における一つの立場として受け入れられるに至っている。

本報告で取り上げるR・ブランドム(R. B. Brandom 1950-)は、こうしたアメリカ哲学の流れの中、分析哲学の伝統において哲学的訓練を受けたネオ・プラグマティストと呼ばれる哲学者の一人である。彼の哲学が興味深いのは、ローティエの弟子でありながら、ローティエのプラグマティズムによる文化政治的哲学批判以降も、哲学に取り組むべき課題があることを示し、そしてその解決の方途を示していることであろう。そこには、彼が解釈する独自のプラグマティズムの立場がある。いわばローティエにおいてプラグマティズムは、哲学批判を含めた文化批判の立場となっていた（したがって政治的でもある）のに対し、ブランドムにとってプラグマティズムは、言語哲学における課題を解決するのに適切な一つの哲学的立場である。

その彼のプラグマティズムがさらに特異であるのは、それが、彼のヘーゲル受容と結びついているということである。本報告では、こうしたブランドムにおける哲学的立場としてのプラグマティズムが、いかに彼の理解するヘーゲル主義と結びついているのかを明らかにしたい。ブランドムのヘーゲル解釈にかなり独特なものがあるのは確かだが、彼の考えるプラグマティズムの鍵となる発想がヘーゲルの哲学と結びついているということは、それをカントと対置したときにはじめて理解可能となる。

まず、ブランドムは、上記のパースの格律を〈わたしたちが何かを「言う saying」ということを、そのときに何を「なして doing」いるのかということから理解する立場〉と理解する。これによって、彼のプラグマティズムにおいては、〈わたしたちが言語使用においてしたがっている規範についての理論〉としての語用論(pragmatics)が重要な意味を持つことになる。

ブランドムの言語哲学はしたがって、語用論（「規範的語用論 normative pragmatics」）が意味論（「推論的意味論 inferential semantics」）に先行し、前者が後者の基礎を与えるという構成を取

っている。彼によれば、こうした意味でのプラグマティズムへの道を開いたのはカントである。ブランダム『純粋理性批判』解釈によれば、カントは①主体による判断の形成を、その主体による規則についての理解(conception)に基づく、規則の適用として理解していたとされる。さらに彼によればカントは②そうして形成された判断（命題構造を持った主張）が、意味の最小単位であり、概念は判断の中ではじめて意味を持つと主張していた。こうして理解されたカントに対しヘーゲルは、③判断の意味をさらに推論的關係の中で理解するという〈推論的意味論〉への道を進めたのである。ブランダム哲学はまさにこのカントからヘーゲルへの道を取り込み、理論化したものとして構築されている。

しかし他方で、ブランダムによる、〈先駆的プラグマティスト *pragmatist avant la lettre*〉としてのカント解釈を好意的に受け入れるとしても、カントの超越論哲学は、①表象主義、②主観主義、③基礎付け主義という、プラグマティズムとはいいがたい内容を含んでいることも否定できない。それに対し、ブランダム解釈するヘーゲル哲学は、①反表象主義、②相互主観主義、③反基礎付け主義を支持するものである。これらの点においてヘーゲルは、カントが先鞭をつけたプラグマティズムをより徹底して展開した哲学者として理解されなければならない。

本報告では、ブランダム哲学の中心的主張を再構成しながら、ヘーゲル主義がなぜ徹底したプラグマティズムとして理解されうるのかを示したい。

参考：

大河内泰樹「ヘーゲルとプラグマティズム」『思想』1100号、2015年12月、pp. 94-107

大河内泰樹「真理と規範——カント的プラグマティズムからヘーゲル的プラグマティズムへ」『現代思想』第43巻第11号、2015年、pp. 208-223